

# 内モンゴル自治区の砂漠化と生態移民

—内モンゴル錫林郭勒盟正藍旗周辺の実態調査から—

卓蘭

東京学芸大学環境教育実践施設

## Desertification and ecological migration in Inner Mongolia Zhuolan, FSIFEE, Tokyo Gakugei University

### はじめに

近年、中国で頻繁に黄砂が発生し、黄砂の原因となった砂漠化問題が世界中に注目されていた。砂漠化という環境破壊に対して、中国政府は「生態移民」という環境政策をとった。「生態移民」政策は生態環境破壊の原因となる生業に従事している人々を移住させて、破壊された生態環境を回復、保全しようということである。2003年から生態移民政策が内モンゴル自治区で本格的に実施されて遊牧を生業としてきた牧畜民たちは生態移民となり定住し始めることになった。本研究では従来の遊牧生活と今日の生活とを比較して、牧畜民の立場から生態政策の成果を検討することを目的にした。

### 調査方法

中国内モンゴルの砂漠化の原因を現地の遊牧畜民はどのように認識しているのか、彼らの生活は生態移民政策によってどのように変化しているのかを明らかにするためにフィールド調査を行うことにした。本研究では内モンゴルシリングル盟正藍旗周辺に調査地を設定した。第一回の調査は2004年の8月2日から8月11日まで、第二回の調査は2007年の11月16日から11月23日まで、正藍旗周辺の渾善達克(ホランシラグ)沙地の砂漠化の状態の観察を行い、合計27戸の牧民から生態移民政策に関する意見と生活の変化に関して面接聞き取り調査と質問紙による選択回答式調査を行った。また、正藍旗の中学校2年生60名に対して質問紙による調査を行った。この質問紙では移住する前後の年収の変化、家畜の数の増減、遊牧生活と定住生活についての意見など15項目

について調査を行った。時期を変えての調査は生態移民政策の開始直後と終了直前の状況を比較するために有効と考えたからである。

### 調査結果と考察

#### 1. 砂漠化の原因

2004年の17事例と2007年10事例を通して、牧畜民たちの砂漠化の原因についての認識は次の5点に整理できる。遊牧民というより、今日的には牧畜民と把握したほうが適切である。2004年の事例1と2007年の事例1の2、2004年の事例2と2007年の事例2の2は同一家族であるので、合計25戸を訪問して、聞き取り調査をした。この結果についてまず考察する。

1) 気候の変化: 砂漠化進行の第1の原因については25名の中の17名が自然災害であると回答している。住民の認識では降水時期の遅れやそれによって起きた旱魃などが砂漠化を進行させたということである。

2) 家畜の増加: 半数以上の13名が家畜頭数の増加が原因だといっている。改革開放政策の初期、1980年代に内モンゴルでは請負制度が導入され、家畜や土地の使用権を個人に配分することになった。これ以後、牧畜民たちは家畜頭数を増加させる方向に向かい、これが過放牧の状態を引き起こし、砂漠化を進めることにつながったのではないかと考えているのである。

3) 区画草地: 草原の区画化が原因になっていると回答した者は9名であったが、第2の原因と直接的な関係がある。すなわち、草原を区画化したこと

により、家畜頭数が増えたにも関わらず、牧草地が縮小し、放牧圧(密度)が上昇して過放牧の状態になったと考えられる。

4) 道路や鉄道の建設: 砂漠化の原因になった新たな現象は 5 戸の事例が示した道路や鉄道建設による牧草地の開発であった。さらに、道路建設が大規模に拡大して牧草地を大量に開発することに拍車をかけた。

5) 人口の増加: 人口の増加が砂漠化進行の原因であると 7 事例の回答で示された。特に、事例 25 では漢民族の侵入に対してかなり批判的であった。漢民族による無理な耕作地の開墾が内モンゴルの草原を大面積で壊したという意見である。

「過放牧」説は現在の中国の市場経済の下で現れた原因論である。この原因論が勢いを増したので、本来、広い草原で移動しながら家畜を増やし、暮らしを立てるといった生活様式が否定的にとらえられるようになった。自然の草原では適度な頭数の家畜を持続可能な範囲で遊牧してきたのであるが、一方、狭い面積で乳牛を飼い、濃厚飼料を与えることは、草原を灌漑耕地化して過剰に利用することである。よく考えてみると、むしろこの方が「草原」を灌漑農耕地に変えて、その持続許容量以上の家畜を育成しているということになるので、いっそうの「過放牧」の状態ということになる。つまり、この「過放牧」こそが、今後、草原の砂漠化を進行させる可能性が高く、「過」に原因があるのではなく、草原の開墾によって農耕地化し、持続的に遊牧する空間が減って、伝統的な遊牧が出来なくなったことではないのであろうか。遊牧民による「過放牧」が原因ではなく、農耕民による「過開墾」が砂漠化の主要因だと考えられる。

## 2. 生態移民政策がもたらした結果

### 1. 自然環境に対する効果

本調査の結果によると、2004 年の時はまだ、生態移民政策が始まって 2~3 年しかたっていないので、効果はまだ明瞭ではなかった。2007 年における牧畜民に対する 10 事例と中学校の生徒 60 名への質問紙調査からは次のことが示された。牧畜民の 10 事例の内 4 事例は砂漠化の進行は改善されたと認識していた。同じく、生徒 60 名の内 38 名が砂漠化は改善されたと回答している。2001 年から 2007 年まで、6 年間の政策実施で砂漠化防止

はある程度は成果を挙げていると評価されている。2007 年の聞き取り調査では、確かに、休牧地、禁牧地の牧草の密度、高さが目に見えて回復していることは牧畜民たちの実感であろう。

事例 20 と事例 21 はトウモロコシの栽培をして乳牛の飼料として使っている。トウモロコシは本来の草原の野草よりも成長が早く、生産量も多いので高効率であると事例 20 では言及していた。正藍旗政府から提供された資料(中共正藍旗委員会、正藍旗人民政府 2002)によると、トウモロコシが栽培飼料(人工草)として毎年栽培を広げていることが明瞭になった。2003 年と 2007 年の植皮率が 40% から 90% に飛躍的に上昇しているという事実(オリギフ嘎查政府の発表)をもって、自然草原の植生が回復しているとは言い切れない。なぜならば、この数値は純粋な草原としての植皮率を示しているものではなく、耕地を含めた数値であることを見のがしてはならないのである。むしろ、本来の草原が舎畜飼育に必要なトウモロコシなどの飼料栽培地に転換されていることからすれば、自然草原の回復という尺度で考えた場合には、後退しているとも言える。小長谷ら(2005)によるとトウモロコシは 5 月に種を撒き、8 月には収穫が終わってしまう。すなわち、黄砂の被害が多く報告される 3 月を含む半年以上は耕地の土は露出した状態にあるということである。この時期は乾燥と強風の時期でもあるため、露出した土壌は風食作用によって砂漠化を引き起こす直接的な原因となる。それに比べて、たとえ過放牧されている草原でも風食作用は和らげられているといえる。

砂漠化防止を行っている一方で、中国政府は牧草地を開拓している。牧畜民たちの土地を奪って、草原牧野を開発して道路を建設することは牧草地を一層破壊し、砂漠化防止の努力に水をさすことになっていると考えられる。従来の牧草地の砂漠化防止と緑地の回復のほかにも生態移民の転入地周辺の環境のことも考えなければいけない。正藍旗政府の資料(中共正藍旗委員会、正藍旗人民政府 2002)の囲封転移政策の第 1 の条件の飼料供給が十分できる飼料基地を作る政策によって、牧畜民家族の何戸かに 1 つの小面積の飼料地、十分な水資源を中心に効率が高い飼料基地を建設した。乳牛村周辺に住民と家畜が集中する傾向が街周辺の生態環境を悪化させることが懸念される。砂漠化の進行抑止と生態環境の改善のために生態移民政策は、いったん改善されたように

見えても実際には新たな草原の開墾や水資源の開発になった。短時間で高生産の利益を得るために行った施策で、結果的には持続的な成果を挙げているのではないかと考えられる(小長谷ら2005.p92)。

## 2. 移住した遊牧畜民の生活の変化

牧畜民の暮らしの変化を次の4点にまとめた。

1) 収入の変化:2004年と2007年の調査結果では、ほとんどの住民の収入が減って、増えたと答えた牧畜民はいなかった。理由は家畜頭数の減少であることが明白である。

2) 支出の変化:2004年と2007年の調査結果では定住して生態移民になった住民の支出が増えていたことが分かった。生態移民になって定住した牧畜民は今までにない支出項目として飼料や飼料の栽培、牧草地の借料、水道料金、燃料、および通行料などが増えた。乳牛の飼育のためにはこれによる収益の半分以上を使っていることになる。

3) 家畜頭数の変化:2004年と2007年の調査から、家畜の過放牧を防ぐための政策で大方の牧畜民は家畜頭数を著しく減らしたことが明瞭である。生きた財産である家畜を失うことは牧畜民にとっては財産を減少させ、生活基盤を失わせるほどのことである。

4) 生活の変化:2004年と2007年の調査からはほとんどの人の生活が改善されていないと答えていることが分かった。とりわけ、2007年の調査結果からは食生活の面で、住民は乳製品や肉を購入して食べるようになっていた。

共通して言えることは、現金収入は確実に増えたものの、飼料購入費や施設・設備に対する経費負担が格段に増え、手取収入は間違いなく減っているということである。

## 3. 遊牧畜民の将来

生態移民政策により強制的に定住させられながら、移住民は草原での遊牧から畜舎での飼育に転換によって収入増加を期待していた。遊牧時代よりも苦しい経済状態へ追い込まれてしまったわけである。それでは、移民たちは元の生活に戻りたいと望んでいるのだろうか。その問いかけに対し

ほとんどの移民は、定住したくない、遊牧生活に戻りたいとの答えであった。それでも、子供の教育のため、あるいは、戻るべき場所が既にないの理由で、定住生活を受け入れざるを得ないというのが現実である。現実と自分の意識の矛盾、遊牧に対する意識の揺らぎが表れている。遊牧を続けたい、子供にも遊牧生活を受け継いでもらいたいと思いつつも、遊牧の将来性に対する不安から、子供の将来を懸念する気持ちが生じるのも当然であろう。

子供たちの意識では、遊牧をしたいという意見が多数を占める。自然環境は回復しつつあるという認識はあるが、まだまだ政策に対しては不満が多いということは、親たちの経済的な苦しさを目の当たりにしているからであろう。自然環境保全のための生態移民は、経済面で豊かになるという生活環境の改善が伴わなければ立ちゆかない。

## 引用文献

小長谷有紀・シンジルト・中尾正義. 2005. 生態移民—中国の環境政策. 昭和堂. p.78, p.91~92  
中国共産党正藍旗委員会・正藍旗人民政府. 2002. 産業結構を大きく調整し、生産経営方式を早く変える事は防砂、止砂、美しい草原を最建の根本的な方法.

## 謝辞

このたびのフィールド調査に際しては、内モンゴル、正藍旗の多数の牧畜民のみなさまに大変にお世話になりました。砂漠化の防止や日々の暮らしについて多くのことを教えていただき、心より感謝いたします。論文を執筆するにあたり、東京学芸大学大学院環境教育コースの小泉武栄先生および小川潔先生には懇切丁寧なご助言をいただきお礼申し上げます。指導教員の木俣美樹男先生には内モンゴルでのフィールド調査法や研究の具体的な進行について指導を受けましたので、深謝いたします。